

小田原史談

第68号

発行所 小田原史談会
小田原市西栢山3310

ご挨拶

会長 井上英一



会員の皆様方にご報告申
上げます。昭和四十八年
度の新役員並びに行事計画
が左記の通り決まりました
ので何分共よろしくご協
力の程お願い致します。

◇ ◇ ◇
◇ ◇ ◇

会長 井上 英一
副会長 難波 明
〃 鈴木 平八
〃 穂坂 行雄
専門委員 中野敏次郎
〃 立木 望隆
〃 竹見 竜雄
〃 内田 武雄
〃 難波 明
会計 曾我 保夫

〃 沖山 敏子
〃 山室 定雄
〃 富田 千春

本年度史蹟めぐり

(1)市内谷津方面

日時 48年6月16日
先導 立木望隆先生

(2)東京西郊方面
日時 48年7月1日
先導 立木望隆先生
講師 木村 博先生
杉山博先生

(3)山中城発掘見学と
伊豆方面

(4)豆相史談会総会(一泊)
日時 48年8月12日

日時 48年8月25日
大雄山最乗寺におい
て、翌日史蹟探訪

下曾我遺蹟(下)

内田 武雄

表土から包含層の底部ま
で三メートル半もあったの
で、前後四回の発掘で(五
十、八〇〇人)ほどかかっ
たと言われているが、遺跡
の全部を知る事は出来な
かったようであるが、この井
戸を中心に両時代とも集落
がひろがっている、井戸の
まわりや、その水の下流に
いろいろの雑物が捨てられ

たことは明らかになった。
そして弥生時代、奈良、平
安初期との木製生活用品、
種類、形態、製法など約千
年の間ほとんど変っていない
ようである。

- (5)日光、今市方面(一泊)
日時 48年9月30日
二宮尊徳先生の足跡
をたどる
- (6)金子最明寺附近
日時 48年10月20日
- (7)石垣山(一夜城址)
その他
- (8)中井方面
日時 48年11月4日
- (1) 日時 49年 未定
墓前祭、その他
- (2) 5月28日 曾我兄弟奉
焼まつり
- (3) 7月11日 北条氏政、
氏照両公墓前祭
- (4) 9月 久野古墳祭
- (5) 9月23日 尊徳墓前祭
- (6) 10月 早雲 氏康
両公の供養祭
- (7) 11月 幻庵まつり

見されたので革袋漆箔の施
されたものの一部ではない
かとも思われた。

また奈良時代の層からは
もも、コウメの種が実に多
数出土した。(その量は中
形バケツ一杯ほどもある)

そのほかの植物種子は両層
とも同じ種類であるのに、
これはこの層からだけであ
った。言うまでもなく、コ
ウメは渡来植物である。万
葉集のこのハナウメがこの
植物についての文献の初見
であると言う。これが多量
に出ることは、国内におい
てウメの伝播の速度の相当
早かったことがわかる。

おそらく府中には国府や
国分寺が存在していたので
このように奈良あるいは九
州方面よりつたつたもの
とも思われる。

土師器や須恵の底や側面
に「大、大家、王」などの
黒書が多いし、先述の如く
くり盆の底に「西」字があ
り、さらにおもしろいのは
多数の木簡が出ていて、そ
の一枚に「外合」とよ
めるものがある、木簡と言
へば平城京出土のものか
育名である。それがここか
らも出ている。樋口清之先
生は律令制社会のあること
を考えれば当然であるが、
しかし、官庁でも寺院でも
ないこんな農村集落へまで
当時文字が普及していたこ
とは、日本における文字の
地方普及に付いて新しく考
えておられる問題であったと
言っておられる。

お米に付いて
弥生後期出土のコメ、奈
良平安初期層出土のコメの
間に、大きさ、形態の変化
が見られない事である。日
本でも所によつては亜印度
種のようなたて長いコメが
出土する所もあると言われ
ているが、これから出土の
おコメには両時代共大部分
はもう丸形の日本種になっ
ている。当時人糞肥料など
のかんけいによつてそうな
ったものかとも思われる。

千代台の南そくに南屋敷と
言はれている所から昭和卅
一年出土したお米とほぼ同
じ種類であるようだ。

この遺跡の最後と思はれ
るそれは「隆平永宝」の発
見である。この貨幣の流通
期間は安外短いので、この
遺跡廃絶はこの貨幣流通の
時期であることが推定され
る。そう言えば緑釉や灰釉
を施した陶片には、奈良時
代よりもむしろ平安時代初
期と考えられるものが少く
なかったようである。(出土
物は国学院大学考古学資
料室所蔵)

東京西郊史蹟めぐり

編集部

降りず降らずの空模様の中、七月一日、参加人員一〇五名をのせたバス二台で出発。厚原バイパス沿いに一路東進、民俗学に造詣深い木村博先生（伊東市在住）が「安楽死」などについて縷縷マイクをとられ、つゆ空を吹きとばすような和やかな雰囲気の中、やがてわが氏照公のかつての居城八王子市街をぬけて川越市に入る。五三五体の異相奇相の五百羅漢、国宝川越大師、各種の文化財建造物を巡り、荒井先生の説明をきき、久能山東照宮、日光東照宮と並んで極彩色豊かな仙波東照宮を拝観、先ず喜多院で昼食をすませ、河越城址を左にみて、新座市野火止の平林寺へ。国木田独歩「武蔵野」のおもかげを想いながら長い参道を歩いて、島原の乱の名宰相松平信綱公及び松平大河内家（女優河内桃子さんの先祖）の墓地をうつつとした林地の中、又近くに「つわものどもが夢のあと」を偲びつつ、街中に、長命寺、三

宝寺を尋ねる。特に三宝寺池は、子どもたち、釣人たちの憩いの場のように、濃緑の林のかげに静かなたたずまいをみせていた。

杉山博先生の先導で練馬の石神井郷土資料室に入る。練馬区立石神井図書館の中にあるのだが、小さくぱりした建物である。入口で「食べ物を自然の幸に求めた昔の人々が生活の知恵として……」の揭示板があざやかにうかぶ。遠い昔からの、今日では珍しいと思われる各種の農耕用或いは生活用の器械、器具類の展示をみて、われわれ祖先の苦労して造りあげてきた「生活の知恵」をここにみる。木立の中の石神井城址。先導者のわかり易い説明に、豊島一族、往古の武將たちの盛衰を知る。かたわらに、共産党非法時代のアジトだったという半ば老朽化した家屋が見える。

最後に道場寺を見学してよどんだ街中の石神井川を後にして、無事午後七時頃小田原に帰着。いそがしい

生活の合間のたのしい一日であった。

以下資料にもとずいて記してみます。

喜多院（天台宗）

川越市小仙波町

喜多院は昔北院とも書いた。もともと星野山無量寺と号し、天長七年（八三〇）慈覚大師円仁が勸を奉じて仏法を東国に弘めるため墓地を求めておられた。ここ仙波の地になると乗っていった牛が急に動かなくなつて宿をとったが、夜中に星が輝いていた。（星野山の由来）そこで一字を建立。降

（一六二四）江戸上野に寛永寺が創建されると山号をこれに譲り、再び星野山の旧号に復した。

寛永十五年（一六三八）

の大火によって現在の山門を除く山内の堂宇はすべて烏有に帰したため、同十六年から十七年にかけて再建された。このとき江戸城紅葉山の別殿を移して客殿と書院にあてた。その後寛永二十年（一六四三）天台は没したが、爾来関東天台の根本道場として、徳川幕府からあつて処遇された。寺

平林寺（臨濟宗）

新座市野火止

当寺は日本でも名高い巨刹で、武蔵野のおもかげを今によく残している唯一の静寂な禅寺である。天授元年（一三七五）武州岩槻城主太田道真公（道灌の父）が岩槻在平林寺村（現在岩槻市金重）に建てたのがそのはじめてで、臨濟宗妙心寺派に属し山号を金鳳山寺号を平林寺禅寺と称する。のち寛永十六年川越城主松平信綱によってこの地へ移された。従って当寺は松平家（現在大河内姓）の菩提所である。

◎野火止用水 寺域は三万坪にわたり広闊にして幽邃大伽藍は松杉の老樹々とする間に梅、桜、楓、竹等の樹林を配し清寂の気を漂わせている。この浄域には信綱公の遺蹟として知られる用水（玉川分流）が縦横に流れ、四季折々の風情は

又格別である。野火止用水は始め松平伊豆守信綱公が平林寺をこの地に移転の折ひそかに水利のないことを嘆じていたが、公が玉川上水竣工の功により幕府より恩賞の沙汰のあった時これを辞退して平林寺供用の水として玉川の水を関口より一樹だけ引く許しを受けた公は家臣安松金右衛門と計り莫大な資金を投じ苦心經營の結果十里の林野を縦横に灌漑して国利民福を興し今に到るまで殖産に偉大な貢献をして史蹟名勝に指定されている。里人はこれを伊豆殿堀と呼んでいる。

◎信綱公墓所 御墓所は本堂の背後の小丘に在り松平信綱公を始めとする大河内家歴代の墓地で約一町歩に亘る区域を占めている。何れも豪壮な墓石で造られ御墓所への参道は左右老杉の中を数条の石畳を以て導かれていた。参道の左側に

は世に平林寺型坐禅灯籠と称せられる特異の形をした苔むす石灯籠数十基が並立しその結構は誠に崇高の念を抱かせるものがある。又御墓所の左端に信綱公家臣安松金右衛門の墓や松林の間に古く詩歌に歌われた

年（一六四五）境内に慈眼堂が建てられた。堂内厨子は天台僧正の坐像が安置されているが、相当な高齢者の面貌をもっている。行年一〇八歳、一一一歳、一三五歳など各説があるだけに貴重なものといえよう。

間には古く詩歌に歌われた

野火止塚や豊太閤五奉行の一人増田長盛の墓や武田信玄公長女「見性院」殿の墓石等がある。

◎野火止塚 野火止塚は、(大河内家墓所後方右松林中にあり)種々の説もあるが、野火の見張台であったとする説が有力である。それはこの種のものがかつてこの平野の各所にその名残りを止めていたことでも判る。但しこの野火止塚は和名抄に見る火田狩猟による野火を見張ったものか焼畑耕法による火勢を見張ったものかは詳かでないが相当古い時代のもものと想像されるものである。

長命寺(真言宗)
谷原の長命寺といえは武蔵野の新高野山、東の高野山として名高い。

開基の増島重明は北条氏親の家臣で小田原落城後出家して慶算といひ高野山に入った。慶長十八年に谷原の地へきて寺をひらいたという。奥ノ院の裏手に、石造十三三王仏があり、五百羅漢や鳥居清長の絵馬等がある。四月二十一日の花嫁市が有名。

三宝寺(真言宗)

練馬区石神井台

応永元年(一三九五)鎌倉極楽寺の権大僧都幸尊が開基。文明九年四月(一四七七)豊島氏を滅ぼした太田道灌は、小仲島といふところにあった寺をここへ移したという。入口の守護使不入の碑は類のない文化財

石神井城址 豊島氏の旧城の一つ。豊島氏は江戸氏と同じく秩父平氏の流れで鎌倉時代の末頃に現在の東京都北区から板橋区、練馬区一带を領有していた強豪であった。豊島氏最後の泰経は、長尾景春に味方して太田道灌に滅ぼされた。城址は当時の遺構が残っている。

道場寺(曹洞宗)
文中元年(応安五年)一

あなたの地区で

講演と懇談会をひらきましょう

あなたの部落で、歴史一般の講演会や、専門家をまじえた懇談会が、随時々講師料々なしでひらけます。それにはまず、あなたの部落の公民館なりお寺なり、会場と日時をきめて、それから本部へ講師(専門委)々を指名のうえ要請して下さい。本部からは、支障のない限りご指名の講師をさしむけますよんどころない場合は、替りの講師に出講していただきます。

土を掘り起すときに使用した。これには「シホソコ」「田ウナイマンガ」等と呼ばれる鉄がある。刃が三本に分かれて、用途によって刃の長さも違っている開鑿用には「クロ鉄」「トソビ鉄」があり、クロ鉄は刃の巾が広く、短いのが特徴である。トソビ鉄は扇状をなした刃を持っている。その他耕やすための農具としては、しろかき、平ならし等がある。

◎農家の生活
見渡す限りゆるい起伏のある耕地が広がっている。晴れた日には青空に富士の霊峰がそびえ、秩父の山々がくっきり稜線をみせている。広い耕地の処々に樹木がこんもり繁っており、樹間に草葎の屋根がのぞまれ夕映えの頃には、紫の煙が野面まで流れている。こうした一幅の風景画さながらの眺めが明治中期頃までのわが郷土練馬である。

この頃までの練馬の農家の生活は貧しいものであった。明治の初期頃までは藍や桑を栽培し、藍玉をつくり、養蚕を行なったことが資料で知られるけれどもやがて米麦や野菜が彼らの

主な生活となった。彼ら農民の生活は星明りの残っている薄暗い早朝から始まる。雨降りさへなければ天秤棒に重い肥桶をかついで野らに出かけ、終日鉄をふるった。子どもも五、六歳になれば弟妹や近所の赤ん坊の子守りをやり、家族と共に野らに出て農事を手伝った。妻女は食事の支度をし家族に食べさせ、後始末が終ると、すぐ夫のあとを追って野らに一家そろって農耕に精を出した。農事は霜の降りなくなった播種時と秋の収穫時は文字通り猫の手も借りたい程の忙しさで、この時期の睡眠時間は四一五時間もしくはそれよりも少なかった。

練馬大根の名は江戸時代から有名であった。東京への出荷は夜中から仕事が始まる。荷車に大根と肥桶を山積みし提灯をつけて家を出る。大根を売ったあとは、町中をまわって糞尿を汲み又荷車に満載して帰路につき、昼頃やっと帰宅し、養蚕を行なったことが資料で知られるけれどもやがて米麦や野菜が彼らの

生活は苦勞の連続であった。

片浦支部便り

鈴木 平八

当史談会の定期総会を去る六月七日午後一時より片浦農協二階に於て開催しました。本部史談会より会長井上英一殿、副会長難波明殿も出席して下さいを盛大にして頂きました。

総会閉会後は、琵琶「七騎落」高杉花水師を聞き源頼朝をしのび、講演は中野敬次郎先生の「曾我兄弟」を聞いて会員一同その感銘も新たに致しました。

特筆すべきは近日、中野敬次郎著「石橋山合戦の前後」が刊行されますので当地区の全団体よりなる石橋山古戦場史跡顕彰会を創設する事に議決された事です。今後本部小田原史談会のよりよき御指導を御願います。

七月二十三日には当支部として真田城、岡崎城方面「真田与一遺跡めぐり」も中野先生の講師で実行されます。

「小田原大地震と天明時代の年具米」は神保栄氏の調査によるものです。

足柄山の聖天堂

神保栄

足柄山は富士山と俱に晴なりました。然し余りに天

てありまして、堂に参拝し

清左門地獄池、フジワイ
ルム古代住居跡等を見学し
て午前中で解散の予定。 て申込んで下さい。

五月二十八日

建久四年癸丑五月下旬比十郎助成五郎時宗
兄弟二人打烈出曾我屋形
打渡鞠児河

五月雨ニアサ瀬見エヌマリコ河

浪ニアソフ我カ涙哉

渡ヨリフカクソタノムマリコ河

親ノ敵ニアウセト思ヘハ

伝兄弟二人意趣

虎歎哀

穂風ナヒク草葉ノ露ヨリモ

ハカナク消エシ人ソ恋シキ

母目涙隙

見ルカラニウサコソマサレ足引ノ

矢立ノ杉ニノコルカタミヲ

(妙本寺本曾我物語)

時事詠 広沢十五夜

傘焼き行事曾我にゆかり深けれむ

傘一本を我もさゝげん

春たけてしきりに鳴ける鶯は

哀しきまでに繰り返えし鳴く

雨の雫をたらせる藤の花房は

彩増して人の眼を引く

しげくなる夜露の庭にみし螢

光りては消えつししばらくをいる

大高く黄い向日葵の咲きかしぐ

朝の清涼をしみじみ味う

まりこ河

二人は曾我村を出ると西
に向い「桑の原田畝」を田
村大道に出る。田村大道は

相模川の「田村の渡」を通
る道の名である。いわは太

山参詣の道で小田原から田
村の渡をわたり鎌倉への道

が「田村大道」(鎌倉古道)

曾我兄弟は鞠児河(桑原
から今の富士道橋附近)を

渡ると、川水も濁り渡瀬も

見えぬ程であった。鞠児河

の下流は酒匂川で曾我村か

ら国府津へ出て東海道を歩

いておれば当然酒匂川とあ

るべきで、鞠児河を渡った

というのは田村大道を歩い

ていたからで、山北町浅間

山裾に鞠児明神を祀るとこ

ろから川の名が生じた。鞠

児河は浅間山の裾を大きく

迂回して流れている。

(妙本寺本 曾我物語跋)

原稿のお願い

感想、随筆、和歌、俳句

雑文、会員の動向等なんでも結構ですからみなさまの

ご投稿をお願い致します。

原稿の送り先は 市内曾我

別所二二一 穂坂行雄まで

尚、連絡事務は市内浜町

一ノ四ノ三 宇野応之ま

で。

(H)